

国 際 健 康 開 発 *I H D*

特定非営利活動法人(NPO)会報 16号 2016年 9月

平成 27 年度の事業報告と平成 28 年度の事業計画および中間報告

牛島 廣治

2015 年 7 月の 15 号から日が続いてしまいました。活動報告をいたします。

1. 平成 27 年度の成果

バングラデシュから Nusrat Khandoker 氏が東京大学の修士学生として来日し、日本大学・東京大学で研究を行っております。平成 27 年度も 5 月から 2 か月間 Pattara Khmirin 氏が来日し我々の研究をサポートしてくれました。6 月中旬に第 2 回国際アジア小児感染症研究会を行いました。この会に Tuan A Nguyen 氏をベトナムから招聘しました。約 50 人の参加があり充実した会でした。また 6 月末には米国から Linda Saif 教授、Quihong Wang さんの来日講演への協賛として支援をしました。さらにタイにおける大学間の医学研究会への牛島廣治の出席の支援(派遣)も行いました。平成 27 年度は海外雑誌に 10 篇以上の論文が掲載されました。国内の学会発表も 10 以上、海外の学会でも発表しました。幅広い活動(留学生支援、実験試薬等の購入)がなされました。

2. 平成 28 年度の中間報告

1)平成 28 年 4 月 29 日 NPO ふよう土 2100 のガイドのもと福島スタディーツアーを行いました。本 NPO 会員 6 人、および外国人 2 人、他 2 人で福島の震災および原発事故後の状況を視察しました。その時の報告は、金子明依さんが今回の号に寄稿してくれました。

2)「平成 28 年度日本大学医学部創立 50 周年記念奨励金外国人招へい事業」で Leera Kittigul 先生が 6 月に日本大学に滞在されました。1 か月間おられました。本 NPO 支援事業からも研究の支援を行いました。Kittigul 先生は研究材料を持参しており、Thongprachum Aksara さんの協力のもと環境水中の病原微生物(ウイルス)の検出を行いました。

3)8 月 14 日「第 1 回国際アジア母子保健研究会」を東京大学医学部 3 号館で行いました。東京大学医学系研究科発達医科学教室の卒業生、主に助産師を中心に 32 名の参加者がありました。北京大学からも 3 名の参加で 1 名は教室出身者です。低体重出生、肥満、母乳哺育、母子感染など広い範囲の発表内容でした。

4)今後の活動は研究支援(試薬の補給、留学生支援)を中心に行いたいと思います。

福島スタディーツアー

金子 明依

東京大学大学院 医学系研究科 修士課程
国際保健学専攻 発達医科学教室

東日本大震災から 5 年が経ち、暖かな日差しが降り注ぐ 4 月の終わり頃、私は NPO 国際健康開発の方々や同級生の計 10 名で、NPO ふよう土 2100 が主催する「スタディーツアー」に参加するために、福島県いわき市を訪ねた。

ふよう土 2100 は、福島県を中心に東日本大震災、原発事故の被災者に対する復興支援、子育て支援や障がい者支援等の活動を行う NPO 法人であり、その活動の一環として、震災による被害が特に甚大であった地域を訪ねる「スタディーツアー」を開催している。被災地を知って、感じて、考えるきっかけとなつてほしいという思いを込めて、ふよう土 2100 の理事長である里見喜生さんは、このツアーを企画し、これまでに 1,000 名近くの方を案内してきた。震災後に初めて福島を訪れる私にとって、被災地を目の当たりにする悲しみと不安、そして自分にできることはあるのだろうかという焦燥感を抱きながら、ツアー当日を迎えた。

晴れ渡る青空に迎えられ、いよいよツアーが始まった。私たちは温泉宿古滝屋から小型バスに乗り込み、福島第一原子力発電所から 20km 圏内の富岡町を目指して、常磐道を北上した。新緑の映える山々を通り過ぎると、空に向かって聳え立つ二本の煙突が目に入った。そこは、「東京電力 広野火力発電所」であった。震災後に原子力発電所が停止し、電力の不足分を補うために、今もなお火力発電の炊き増しが行われている。震災前、約 30 パーセントの稼働率であった広野火力発電所は、今ではほぼ 100%の稼働率で首都圏への電力供給の一端を担っている。震災直後は電力不足が全国的に話題となり、人々は電力に対する意識を持つようになったが、時間の経過と共にその意識も薄まり、電力がどこで、どのように、どのくらい作られているのか、私を含む多くの人々は忘れていて、あるいは無関心でいるのではないかと気づいた。スイッチを押せば電気が付くという便利な生活に甘んじて、電力のこと、日本のエネルギーのことを考えずにいた自分が情けなく思えた。

バスは更に北へと旅路を進め、福島第一原子力発電所から 10km 圏付近に位置する富岡町に入った。気が付くと、あたりの景色は一変していた。視界を塞がるように積み上がった黒い袋(除染廃棄物)、折り重ねるようにして置かれた廃車、雑草に覆われた線路、そして人気のない家屋と校舎。震災直後に、テレビの画面を通して目にした光景を呼び起こすような景色が目の前に広がっていた。復興作業が進められ、津波によって破壊された家屋はほとんど残されていなかったが、きれいに整備された更地は、この場所が経験した凄惨な出来事を無言で語っているようだった。そしてバスは、富岡町の岡内東児童公園の側で停車した。そこには、ぐしゃぐしゃに潰されて変わり果てたパトロールカーが展示されていた(写真1)。2011 年 3 月 11 日、このパトカーには、住民の避難誘導のため出動した双葉署の警察官 2 名が乗っていた。しかし、車ごと津波に吞まれ、1 名は震災から 1 か月後に遺体で発見され、もう 1 名は現在なお行方不明のままである。殉職された 2 名の警察官、そして、命を奪われた多くの方が経験したことは想像を絶するものであると思う。しかし、このパトカーのような震災遺産を通して、私たちは犠牲者を想い、自然の威力を知り、そして、次の世代のために今自分にできることはないかと考えを巡らすことができると私は思う。

バスに戻り、居住制限区域に入った私たちは帰還困難区域の境界まで道を進んだ(写真 2、3)。街には人の気配は全くなく、あの日から時が止まったままだった。帰還困難区域を隔てるバリケードとその先に広がる住宅地を眺めると、これは現実なのかと疑ってしまうほど、その景色に驚き、心を痛めた。目には見えな

い放射線を恐れ、自分の家に、故郷に戻るこ

ができない人々は今も大勢いることを改めて思い知った。震災時、富岡町には約1万6千名の住民がいたが、大多数の住民(約1万5千名以上)は今も自宅に戻ることができずにいる。「電気を使う場所は日常を送っているが、電気を作る場所は日常を奪われている」、という里見さんの言葉が頭から離れなかった。

バスは最後の停車ポイント、「いわき市浜風商店街」に到着した(写真4)。いわき市の最北端に位置する港町である久之浜町は、東日本大震災により甚大な被害を受け、特に、商店街は地震・津波・火事・原発風評・盗難に苦しんだ。そんな困難な状況においても、住民の希望と商店主の願いを団結させ、2011年9月3日に久之浜第一小学校敷地内に仮設店舗の「浜風商店街」がオープンした。私たちは「からすや食堂」で昼食を取り、商店街を散策した。どの店舗にもとても温かくアットホームな雰囲気が漂っていた。11店舗が肩を寄せ合い、支え合いながらこの5年間を過ごしたのだと身に染みて感じた。そして、店舗の一つである「久之浜ふれあい情報館」には、大震災の一部始終を記録した写真や、全国から訪れた方からのメッセージで埋め尽くされていた(写真5)。テレビと本だけでは伝わりきれない被災地の経験と現在の思いを、ここで一步深く知ることができたと感じた。商店街の皆さんに見送られ、私たちは帰路についた。

「東日本大震災はまだ続いている」。このスタディーツアーに参加して改めてそう感じた。公営住宅の建設、震災関連死、風評被害、廃炉作業、汚染土の処理などなど、依然として前途には困難が立ちほだかる。災害の多い日本であるからこそ、復興と共に、私たちは震災から学び続けなければならない。私たち誰もができること、それは震災と被災地を知る努力をす

ることだと思う。過去からの学びこそ、現在と未来へ繋がる第一歩だと感じた。今後、もっと多くの人がこのスタディーツアーに参加し、自分の五感と心で、福島のこと、原子力発電のこと、そして日本のことを考えてほしいと心から願っている。



写真1 被災パトロールカー



写真2 居住制限区域(右側)の様子



写真3 帰還困難区域を隔てるバリケード



写真4 浜風商店街入り口



写真5 久之浜ふれあい情報館の展示写真

アメリカで高齢出産&母乳育児

Hitosugi, Sadae 一杉 定恵
Mayo clinic

2014年の春、私は第4子をお腹に授かりました。その時既に40歳を迎えていたので少々戸惑いもありましたが、上の子たち3人に「お母さんのお腹にまた新しい赤ちゃんが来たみたい。産んでも良い？」と聞いてみたところ、子どもたちは皆「やったー！！今度はガール？それともボーイ？」と言って大喜びしてくれたのでとても嬉しかったのを覚えています。

赤ちゃんを授かった喜びを味わったのも束の間、私は激しいつわりに襲われたため殆ど食べ物を口に出来ず、今までどんなにダイエット

をしていても成功しなかったのにたった3週間で5キロほどストーンと体重が落ちてしまいました。もともとあった低血圧のせいか血圧は上が80台で下が50台前後、体はふらふらで仕事場の周りの人に何度も「大丈夫？」と心配をされましたが、今回は40歳を過ぎた高齢出産なので不安なのと、まだ安定期に入っていなかったこともあり誰にも妊娠を伝える勇気がなく、仕事場では一緒に働いていた主人のみ妊娠を知っていました。働くママなら一度は経験した事があるとは思いますが、やはり「いつどのタイミングで、仕事場に妊娠を伝えるか」というのはなかなか難しいところがあるのではないのでしょうか。

< 出生前診断する？しない？ >

第二子、第三子を妊娠した時にも30歳を過ぎていたので出生前診断を薦められたのですが、そのときはまだ体力に自信があったのと、自分自信はまだ高齢出産という認識があまり無かったので、過去に「テスト受けてみる？」と産科医に聞かれても、そのようなものは必要ないと判断し全て断っていました。しかし今回第四子を出産するにあたり、既に私は40歳を過ぎていて様々なリスクが高い事を主治医に説明されたので、主人とよく相談した結果、出生前診断を受ける事に決めました。アメリカでは出生前診断は35歳以上ですと保険適用内が殆どですので、テストを受ける人妊婦が多いようです。出生前診断を受ける旨を主治医に伝え、まず産科医とは別の専門のカウンセラーとの面談をセットアップされます。面談で話す内容は、テストがどのようなものか、ダウン症も含めたいくつかのトリソミーの詳しい、またそれらの詳しい症状などです。そして、一番重要なのは「もしこれらの異常が見つかった時に

夫婦がどうしたいのか」ということを細かく、時間をかけてしっかりと話し合います。こちらで行われる出生前診断で一般的なのは MaterniT21 Plus と呼ばれるもので、お母さんの血液中に含まれる「へその緒を通して出てきた胎児の DNA」を採取して、13、18 そして 21 番染色体のトリソミー異常と、性染色体を調べます。お母さんは採血するだけなので、羊水検査に比べると痛みや流産のリスクが無く安全、ということで最近アメリカではこのテストが主流なようです。テストの結果が来るまでは少々心配もありましたが、幸いにも結果は Negative＝異常なし。ちょうどこの頃安定期に入ったのと、この検査結果が異常無しだったこともあって、この時期に仕事場の仲間に妊娠したことを伝えました。ちなみに私たち夫婦は今までの妊娠で性別を聞いた事は一度も無かったのですが、今回の出生前診断では性染色体も調べるということで、今回の妊娠で初めて産まれてくる子の性別を聞きました。産まれてくる赤ちゃんは女の子だとわかり、女の子が欲しいと言っていた長女は大喜び。男の子が欲しかった長男はしばらくの間落ち込んでいました。次女はその時まで2歳半でしたので、どちらでも良かったようです(笑)。

<妊婦生活、低置胎盤の異常があると言われて>

安定期に入ってすぐ、40 歳を過ぎているのでお産のリスクを減らすために出産予定日を一週間早めて induce labor (誘導分娩) することを主治医より薦められました。上の子たちは3人とも予定日一週間遅れでもなかなか降りて来ず、陣痛促進剤を使つての induce labor を過去3回経験済みだったので、出産時のリスクを少しでも減らせるのであれば良いと思い、今

回は induce labor することを OK しました。赤ちゃんが出てくる日が決まり家族に知らせると、子どもたちはカレンダーにその日を書き込み、指折り数えてその日＝赤ちゃんに会える日を待つようになりました。

妊娠五ヶ月すぎに行われた最初の超音波検査で、今回の妊娠は低置胎盤の異常がある事がわかりました。低置胎盤とは赤ちゃんが出てくる子宮口のすぐ横に胎盤が形成されてしまい、出産時には出血多量などのリスクが伴います。最初に検査したときは子宮口との距離が 1.7cm と言われ、2cm 以上にならないと帝王切開になると説明されました。ただこの距離はだんだんお腹が大きくなるに連れて離れて行く事が多いので、「普通分娩のチャンスはまだまだあるから大丈夫よ」、と主治医に言われました。私の場合は上の子たちがみな普通分娩で産道を通して出てきていますので、できればお腹を切りたくはないな、と思っていたのですが、最終的には「帝王切開も普通分娩もお産するということには変わりはなく、赤ん坊が元気に出てくるのであれば切っても切らなくてもどちらでも良い」と思うようになりました。通常アメリカでは健康な妊婦ですと妊娠期間中に行われる超音波検査は1、2回なのですが、第4子ではこのような胎盤の異常が見つかったので、合計5回ほど超音波検査を受けることになりました。専門の技師が超音波で詳しく胎盤の位置や赤ちゃんの異常の有無を確認しながらデータを取り、超音波エキスパートの医師と私の主治医とでディスカッションしていきます。アメリカの病院が全てこのようにきめ細かいとは限らないのですが、私が今回出産したメイヨークリニックでは”The needs of patients come first” がモットーで患者のニーズに合ったレベルの高い医療が提供されており、私の場合は高齢

出産でなおかつ低置胎盤の問題がありました。が、ドクターやナースたちが優秀でなおかつ患者へのケアがとても細かく、今までの4回の妊娠中で最も快適なとても安心した妊婦生活を送る事ができました。仕事ですが、今回の妊娠中は予定日3日前まで働きました。日本と違いアメリカでは殆どの方が予定日当日もしくは破水するまではたらく人が多いようです。臨月になってからもなるべくなら動いていた方が良いと聞いた事があるので、私も出来る限りは仕事に行こうと思っていました。バランスの良い食事を心がけてよく動いていたせいなのか、幸いにも出産予定日前の最後の検診では胎盤の位置はぐっと上がり、帝王切開することなくお産が出来る事を知らされ安心しました。

メイヨークリニックでは出産前に夫婦で産科病棟のツアーが組まれます。ツアーでは実際の labor room (出産する部屋) や recovery room (産後二日間滞在する部屋) などを見せてもらうことができます。またツアーではまず病院に着いたらどうするか、昼間の入り口はここから、夜間の場合の入り口はここ、出産当日に家族たちが来る場合の待合室はここ、チェックインの仕方はこのようになど、細かく丁寧に教えてもらえます。これによって付き添いの旦那さんや家族たちも当日病院で慌てる事無く、とてもスムーズに入院、お産を迎えられます。また産まれてきた赤ちゃんが NICU (新生児集中治療室) に入る場合などもあるので、「母乳を持ってきたら、このようにしてここにしまってね」など、これらについても前もって詳しく説明してもらえるので、とても安心する事が出来ました。

<いよいよ出産>

出産当日は朝8時に産科にチェックインし、まずはその日の担当のチーフドクターがベッド

サイドに来てくれました。その際に、レジデント、無痛分娩のための麻酔医、学生、そしてその日の担当のナースなどがみな順番に自己紹介してくれます。ちなみに10年ほど前に日本の某大学病院で一人目を出産した際は、当たり前なのかどうかはわかりませんが、お産の最中に何の知らせも無く、いきなり学生が4、5人ほどドドドーっと入ってきて慌ただしい中での出産でしたので、とても驚いたのを覚えています。このように事前に「このスタッフや学生たちが今回のあなたのお産に携わりますよ」と知らせてくれるのとそうでないのとでは、だいぶ違うなという印象を受けました。

点滴で oxytocin を入れてからもなかなかお産は進みませんでした。もともとお産の進行は時間がかかる方なので、テレビをみたり部屋の中でお産の進行を進めるためにスクワットをしたりして気持ちに余裕を持って過ごしていました。それでもさすがに7時間を過ぎても一向ににお産が進まなかったため、人口破水して陣痛を促す事になりました。人口破水をする際にも「先に Epidural (無痛分娩の麻酔) をしたい？それとも破水の後が良い？」と、どちらが良いか聞いてくれたので、私は以前の経験で破水した後に一気に陣痛がマックスになって驚いたことがあるので、人口破水する直前から Epidural をしてもらうことを希望しました。そして人口破水後にお産は一気に進み、1時間半後にはレジデントと担当医によって赤ちゃんは無事取り上げられました。このように「どのようになりたいのか希望を聞いてもらえる」ということは、患者にとっても選択権があるということで、その部分は日本での出産と大きく違う点ではないでしょうか。

<自分の Medical Record をチェックできる便利さ>

私が出産したメイヨークリニックでは患者がオンラインで自分の Medical Record をいつでも見る事が出来ます。どんな予防注射をいつどこで打ったのか (Immunization record)、今までに行った検査について、またそれらはどのような結果だったのか。例えば私の場合はこれまでに行ったすべての超音波検査の詳しい結果、低置胎盤の位置、胎児の臓器のサイズに至るまで、すべてが細かく記載されており、またそれをオンラインで患者が自由に見る事が出来ます。例えばどこか違う州に引っ越さなければならなくなった場合や、セカンドオピニオンでどこか他の病院に行く場合なども、「自分のメディカルレコードを自分で持って行く事」ができるのです。またメイヨークリニック内でも他の科に受信する場合にも、これらのデータがすべてオンラインで見える事ができるので、いつ何処の科でどのような治療を受けたのか、今飲んでいる薬はどのようなものなのかなど、ナースやドクターはスムーズに確認する事ができます。これは他では例がない、とても良いシステムだと思いました。それだけ、「自分たちの診断に自信を持っている」からこそ出来るのではないのでしょうか。私も日本であちこちの病院にかかりましたが、その度に診断書をもらうのは相当な労力と時間がかかりました。中ではすぐにカルテを出したがないドクターも居るのが現実です。日本でもこのシステムが導入されれば患者自身が自分の診断に納得行く・行かないが決められるので良いなと思いました。

<仕事復帰と母乳育児>

さて、無事に出産を終えて赤ん坊との蜜月を過ごしますが、アメリカでは通常産休は長くて

も 12 週間、約 3 ヶ月とされています。これは日本に比べると一見短くて不利なように見えるかもしれませんが、どんなポジションもどのような雇用形態でも「出産によって解雇される事がまずない」ので、私個人的には仕事にすぐ復帰できるのは平等で良いシステムだと感じています。また職場の人たちにとっても 1 年仕事を抜けられるのと 3 ヶ月で戻ってきてくれるのとは、仕事の時間も労力も違います。もちろんアメリカでまだ首の座っていない 3 ヶ月の赤ん坊を、初めて保育園に預けるときは私自身かなり落ち込みましたが、周りのワーキングママたちもみな 3 ヶ月で仕事に復帰して、どんどんキャリアアップして輝いているのを見るうちに、だんだん自分の肩の力が抜けて、仕事と育児との良いバランスが取れるようになって行きました。仕事が 3 ヶ月で復帰となると、やはり必要になってくるのは赤ちゃんに与える母乳の「搾乳」です。幸いにも私は上の子 3 人とも完全母乳で育ててきたので、できれば同じように母乳をあげたいと考えていました。もちろん母乳の量＝愛情の量ではありませんが、母乳で育てたおかげか我が家の子たちは保育園を病気で休む事があまり無く、ミルク代もかかりませんし、なにより「おかんのついている飲み頃のおっぱいが出ると」いうのはとても便利で助かりました。なので、母乳が出るのであれば、面倒でも搾乳の時間をできるだけ取って、赤ちゃんにお母さんのお乳を飲ませて欲しいと私自身は思っています。アメリカでも近年母乳育児はとても推奨されており、私自身、上の子 3 人は皆 2 歳近くまで母乳を飲ませていたので「ちょっと長過ぎたかもな。」と反省していたのですが、それをドクターやナースたちに話すと逆に「Great!!それはとても素晴らしい事よ!」と賞賛されました。

私が働いているメイヨークリニック内には、ここロチェスターのキャンパス内だけでも約 50 部屋もの Lactation room (搾乳室) があります。そこにはラウンジチェア、テーブル、電話、お湯の出る清潔な洗面台、除菌用ワイプそして搾乳機のモーターが設置されています。重いモーター部分は部屋に既に設置されているので、お母さんたちは母乳を入れるボトルとお乳に触れるキットの部分だけ持って毎日仕事に行けば良いのです。さらに、「今朝はものすごく忙しくて搾乳機のキットの部分をうっかり忘れてしまった」、または「いざ搾ろうとしたらキットにヒビが見つかった／壊れている」等あったとしても大丈夫。階下の売店に行けば「すべてのパーツ」が売られているので慌てる事無く、とても安心です。そして何より、搾乳機代金を Mayo clinic に申請すれば、保険で搾乳機代が帰ってくるシステムがあること。このクリニック／企業としての母乳育児のバックアップはかなりのものだと思います。おそらくクリニック内にはナースや秘書が殆ど女性たちである事、また Medical doctor や研究者にも女性がどんどん進出していることで、このようになって行ったのだと思います。私自身も日本で産後お仕事する際には近くに搾乳室が無いので、トイレで搾っていました。ですがここでは「産後すぐに働くから」、「仕事場で思うように搾乳できないから」、といって母乳育児を諦める必要がありません。日本の企業または大学などの教育機関でもこのような母乳育児／お母さんたちへのバックアップがどんどん増えたら良いなと思います。

< 保育園でおっぱいはどうやってあげているの？ >

まずアメリカでは保育園探しも一苦勞。日本と違いアメリカでは行政が補助を出しておらず日本で言うところの「認可保育園」というものがないので、こちらにあるのはすべて「私立の保育園」になります。さらに私が住んでいる Rochester は町が小さいので保育園の数が限られており、産後仕事復帰を考えているなら妊娠 5 ヶ月の安定期に入ったらすぐにでも保育園にデポジットを払って、自分の子どもの空きを hold (押さえて) もらわなくてはなりません。今回は妊娠 5 ヶ月の時に上の子が通っている保育園に問い合わせましたが、すでに 1 年先まで空が出ないとの事、、、。仕方が無いので別の保育園に問い合わせたところ、5 月からなら空があるという事で、まずはそこに赤ちゃんを預ける事にしました。最初はどうなるか不安でしたが、いざ行き始めていると赤ちゃんはとてもリラックスしており、よくおっぱいをのみ良く寝ているようで安心しました。担任の Ms. Linda は 3 人の子育てを経験したベテランの先生で、私の希望も親身になってちゃんと聞いてくれるので安心して赤ん坊を任せられ、とても満足しています。このように「安心して赤ん坊を預けられる」ということは働く上でとても重要な事で、日中仕事に集中できる重要なファクターだと私は思っています。

母乳は、仕事場の搾乳室で搾ったものを自宅で冷凍しておき、保育園に出かける前に家で解凍してから哺乳瓶に入れます。そしてボトルには日付、フルネーム (ファーストネームが同じ子もクラス内に居ることもあるので、必ずフルネーム) を書いたステッカーを貼って、保育園の冷蔵庫に保存します。母乳を飲ませる時間になると先生が個別のカップ型の容器に温かいお湯を入れて、そこに哺乳瓶を入れ人肌まで温めてから赤ちゃんに与えてくれます。個

別のカップで温めてくれる事により、万が一哺乳瓶からミルクが漏れていたときも他の赤ちゃんたちのボトルが汚染される事を防ぎます。保育園では一日のスケジュールと共に、何時にどのくらい母乳を与えたのか、残さず飲んだのか等、きちんと記録してくれるのでとても助かっています。私事ですが、夕方仕事が終わって保育園に迎えに行った時、赤ちゃんが今日も保育園で母乳を美味しそうに飲んでくれたのを先生から聞くと、安心して一日を終える事ができるような気がしています。

母乳育児については今日本では色々と問題も出てきているようですが、ここでも書いたように乳の量イコール愛の量ではありませんので、出なくてもそれはあくまで「個人差」であって落ち込む必要もありませんし、今は粉ミルクもクオリティーの高いものが売られていますので、それらを代用すれば良いと思います。また、すべてのお母さんたちが私のように恵まれた「母乳育児」できる環境ではありませんので、ここまでするのは企業や病院、大学全体レベルでのバックアップがどうしても必要になってくると思います。もし働くママたちが、仕事を復帰した際に「仕事場に搾乳室がない」「搾乳すると言って仕事を抜けるのは気が引ける」などの理由によって母乳育児を諦めなくても済むように、日本の企業、大学、病院や行政がもっと働くママたちの母乳育児をバックアップしてくれたら、と願っています。

関寛斎と陸別

牛島廣治

本年(2016年)、新聞での本の紹介と思うが、ふとしたきっかけで、高田郁の「あい」という実在した人物をドラマ化した本を読んだ。今まで見過ごしたか、記憶に留まらなかった関寛斎

の妻からみた関寛斎の人間ドラマの本である。江戸の末期から明治初期にかけての激動期における医学の流れのなかで妻から見た関寛斎一個人の生き方が書いてある。関寛斎については徳富蘆花の「みみずのたわごと」や司馬遼太郎の「胡蝶の夢」にも登場している。

江戸末期から明治初期に関しては、私の故郷の佐賀においては藩主の方針もあり、また長崎に近いことから蘭学が一早く取り入れられた。伊東玄朴、佐野常民などの人物がいた。その時代に関寛斎もいた。「あい」を読んで行くうちに、関寛斎の終焉の地が北海道の陸別で、私の長女家族がいる帯広から近いことがわかった。開墾の時代の北海道のその地は自然の厳しさが今よりもっと強かった。今回の帯広の旅行は娘家族に会うことと、関寛斎の終焉の地の陸別を訪れることにあつた。

季節的には夏の始まりで、ジャガイモの花が白や薄紫に咲いており、大豆・小豆、トウモロコシの実がつく前であり、蒔(ふき)が道路の両脇に生い茂り、一面北海道の農産物が地を覆っていた。

帯広空港に着いてまず足寄(あしよろ)町を通って阿寒湖の方に行き、湖畔のホテルで一泊した。中国などからの海外からの観光客も多かった。中国人が多いのは2008年の中国メロドラマ(非誠勿擾:狙った恋の落とし方)の影響もあろう。阿寒湖ではチュウレイ島にあるマリモ展示観察センターを見学した。次の日、車で山越えをして陸別に行った。駅が観光のスポットになっていた。陸別は日本で一番寒いところと言われている。銀河やオーロラが良く見えるという。高倉健主演の「しあわせの黄色いハンカチ」の撮影場所、気動車運転体験の場所としても知られている。関寛斎資料館は駅の建

物の一角にあった。一角といっても十分すぎる広さである。

関寛斎の人生物語は、本だけでなく Wikipedia や <http://www.saiki.tv/~miro45/sekikansai.index.html> で見ることできる。引用してみたい。

関寛斎は天保元(1830)年2月18日、上総国山辺郡中村(現千葉県東金市)の農家に生まれた(陸別に中村の姓が多いのは関係あるかもしれない)。四歳で母に死別し、母の姉の嫁ぎ先である在野の儒学者関俊輔に預けられ、後に関家の養子になった。関俊輔は農業のかたわら私塾の「製錦堂」を主宰していた。この塾は門弟数百人を数え村塾のレベルをはるかに凌駕して、その名声は近隣に聞こえ、「富貴にして人に屈するよりは、貧賤にして志をほしいままに如かず」と謳われた。自らは清貧に甘んじながら、寺子屋にも通えない貧家の子供たちにも教育と心配りを忘れず、世のため人のために尽くすことこそが人の生きる道だと説く養父俊輔の生き方と教えは、寛斎の人生航路に大きな影響を与えた。

養父俊輔の勧めにより、十八歳で佐倉の「順天堂」に入門する。貧しい農民の子である寛斎は、師である佐藤泰然の書生になり下働きをしながら医学を学んだ(各地を廻って牛痘接種をしたと日記に記している)。当代一流の蘭学者でたぐいまれな人格者であった佐藤泰然の信条は「方今(今の世で)、人を拯(すく)い世を済(ただ)す、医に如くは無し(医術に及ぶものはない)」であった。泰然に医者たる人間のあり方について薫陶された関寛斎は、佐藤尚中と共に順天堂の双壁と謳われた。

嘉永 5(1852)年、寛斎は養父俊輔の姪の君塚アイ(天保 6 年 11 月 5 日生)と結婚。安政 3(1856)年、関東における交通の要所であり醬

油醸造の地である銚子で医院を開業した寛斎は、親交を結んだヤマサ醤油当主の浜口梧陵から依頼されて江戸の種痘所に赴き、伊東玄朴・三宅良斎にコレラの予防法を学び、銚子のコレラ防疫に業績をあげた。その成果を認めた浜口梧陵の援助により、万延元(1860)年に長崎に留学、ポンペのもとで一年間学び、文久 2(1862)年に長崎から銚子に戻った。

梧陵は寛斎にさらに長崎で学ぶように勧めたが、文久 3 年に請われて徳島藩の藩医となり徳島へ移住した。後に寛斎は梧陵の勧めに従わなかった事を深く後悔する。もし従ったら明治時代の医の世界でもっと違った業績を残したかもしれない。(後述の徳富蘆花に送った句を参照)

明治元(1868)年、戊辰戦争に軍医として従軍し江戸へ下った後、奥羽出張病院頭取を拝命。奥羽戦終結後徳島に帰り、明治 2 年に徳島藩医学校を創立して自ら校長に就任した(当時漢方医と西洋医との軋轢、宮仕えの苦労などあった)。

明治 6(1873)年、禄籍を奉還して徳島住吉村に医院を開業、翌年には東御殿跡(現在の徳島一丁目)に移った。爾来一開業医として徳島で三十年間、地域医療のために尽くして、庶民に「関大明神」と慕われた。金持ちへの往診には駕籠を要求し、診療費も安くなかった。しかし、貧しい人達からは診療費を取らず施療した。この間、無償で種痘を施した人数は数千人に達した。

寛斎は二宮尊親(二宮尊徳の孫で豊頃町で開墾をした)から大きな影響を受けた

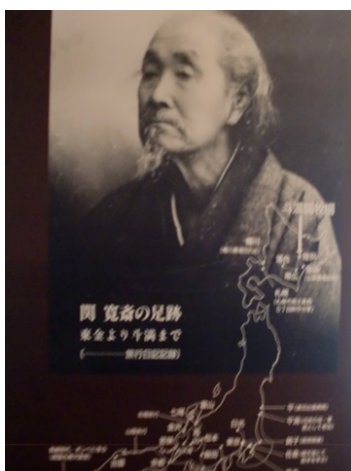
明治 35(1902)年、医を廃業した寛斎夫婦は結婚五十年の金婚式を徳島で挙げた後に、北海道へ旅立った。旅立にあたり、「人生 100 歳、70 歳は中途」と記している。時に寛斎は 72

歳、妻のアイは 68 歳。すでに北海道には、明治 25(1892)年に、四男の又一が札幌農学校に入学していた。明治 27 年には、石川郡樽川植民地原野の貸付を受けた。又一が札幌農学校を卒業すると、さらに北海道の奥地の十勝・釧路にまたがる陸別原野の貸付けを受ける。関寛斎とともに徳島からの移住者を入れた。妻のあいは札幌での療養の後病死する。冬季には気温がマイナス 30 度以下になることも珍しくない厳寒の斗満(現陸別町)の地で、寛斎は周辺住民に施療しながら開拓に携わり、入植十年後の大正元(1912)年 82 歳で没した。寛斎は、トルストイと二宮尊親に深く心酔しており、小作人に農地を解放することを希望したが、家族に強く反対されて苦悩の末に服毒自殺した。

人並みの 道は通らぬ 梅見かな (関寛斎が徳富蘆花に贈った一句)

陸別から、帯広に戻った。娘家族の牧場に立ち寄った後、帯広空港の近くのペンションに一泊し、東京に戻った。北海道の自然、農産物・酪農製品などとともにこの地で終わった関寛斎の人生と、それに同時代の佐賀の偉人(医人)のについて思いを寄せた。

(2016.7.16-18)



関寛斎碑
(佐倉順天堂病院長佐藤恒二書)



陸別は映画「幸福の黄色いハンカチ」のロケの場所でもある。

あとがき

15 号から 16 号の間が長引いたことをお詫びいたします。特に一杉定恵様には原稿を長くためていたことをお詫びいたします。

本号は牛島と江下で編集しました。本活動に御賛同くださっている皆様方には、引き続き御支援の程よろしくお願い致します。